

第62回 平和ボケ…。

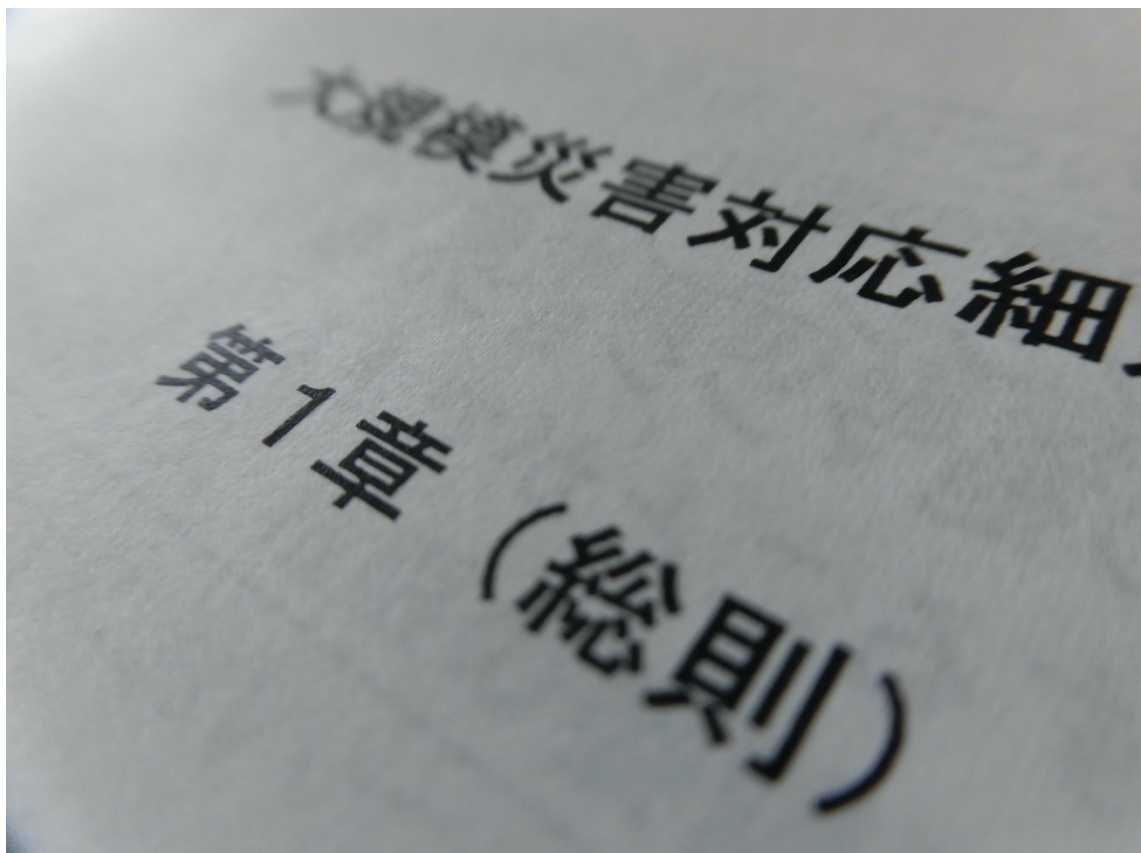
IT生

現代日本人の特性を表現する際、もっとも、よく使用される言葉は、「平和ボケ」である。

日常の価値観に縛られて、それ以外のことは「想定外」と言い放ち、座して死を待つということになるのか。

防災対策はもとより、企業経営、昨今問題となっている政治家、官僚の不手際…など枚挙にいとまがない。

先日、住んでいるマンションで進めている防災計画の説明会が開かれた。阪神間にあるマンションの周辺は再開発が進み、高齢化した住み手を失った住宅が次々とマンションに建て替えられている。要するに、不便な山手にありながら、さらに人口密度が年々過密になってきているのである。そこで、マンションでは、南海トラフ地震が発生し、ライフライン、物流が失われたとの想定で、避難所など行政支援に頼らない計画に着手した。



災害が頻発しているのに、わがことととらえず防災計画に反対する住民がいる

今回行われた説明会は、一部有志による約2年間の取り組みの成果であった。

その説明会に出席した御仁が、とうとうと反対意見を述べだした。いわく、「マンションまで津波はこない」「頻度の少ない地震より身近な土砂災害対策をすべきだ」というわけである。そもそも、計画の趣旨であるライフラインの途絶、物流の喪失といった事柄を全く視野に入れていないのだ。計画の趣旨の前提は最大規模想定で南海トラフ地震がモデルとされているが、前述したマンションの立地条件が背景にあるため、災害の種類は選ばない。ほかにも2つほど意見があり、いわく、降雨で浸水する箇所がある、がけが崩れている…。

こうした指摘は施工業者がやるべきテクニカルなことであり、防災計画とは別次元の話で、日常の理事会で検討すべきことである。

なぜこのような話が出てくるのか。要するに、自分たちの生活が災害により大きな影響を受けるということを想像すらしたくないのである。いってみれば思考停止である。

そこで、疑問をなげかけてみた。「トイレが使用できなくなったらどうしますか?」。当然、饒舌な弁論家としてしられる御仁も含めて誰からも回答はない。

こうした神戸の片隅のマンションで起こった出来事が、そのまま国家規模でも起こっているのが、近ごろの世情であると思うと、笑いごとではすまないと思うのだが。

(令和2年9月)